

## レバノンの方程式

イスラエルによるレバノン空爆および侵攻によって、多くの犠牲者が出て、五人に一人が家を失っているとされている。在留日本人を含めて数多くの人々が、退避路を見つけて安全に退避することに苦労されているようだ。しかしこの問題を人道的見地のみから語っても限界があるようだ。

この戦争は、多くのわかりにくさを伴っているようだ。

レバノン南部に展開する「テロ組織」ヒズボッラーがイスラエル兵を拉致し、イスラエルが解放作戦に乗り出したというだけでは、なぜ国際社会は対テロ戦争のときのようにまともならないのであろうか。

戦闘による被害と混乱の拡大を止めるのであれば、なぜ即時停戦を支持しない国があるのだろうか。

レバノンの国連兵力引き離し部隊(UNIFIL)に対し、なぜイスラエルは攻撃を加え、国連はかくも激しく反応しているのでしょうか。

これらの疑問に答えるためには、レバノンを舞台として絡みあう複雑な方程式を理解できなければならない。レバノン問題には6つの国と国際機関が関与している。この方程式のそれぞれの項は複雑だが、本稿ではなるべく簡単にこれらを提示してみたい。

### 【レバノン】

レバノンのヒズボッラーは、82年から00年にわたって継続されたイスラエルのレバノン占領を終了させ、抵抗運動を通じイスラエルを撤退させるために作られた。ところが、2000年にイスラエルが撤退すると、ヒズボッラーは政治化を余儀なくされた。しかしながら、武闘組織であり続けなければならない宿命を抱くヒズボッラーは、存在意義を問われる事態に直面した。このような中でパレスチナのガザ地区にイスラエル軍が侵攻し、イスラエル人を拉致する事件が発生した。この機会を捉えたヒズボッラーは、イスラエルに二正面作戦を強いることでパレスチナ支援を標榜し、正当性と大義を得ようとしたのではないか。また、イスラエル兵を拉致し人質交換を要求して、パレスチナの支援者を気取ろうとしたのではないだろうか。

### 【パレスチナ】

冷戦以降、パレスチナの大義の下にアラブ・中東世界が団結する様子は消えうせ、唯一の超大国米国が強力に支援するイスラエルの前にパレスチナは孤立してきたが、ガザ地区侵攻以来、パレスチナ人の苦難はいつそう大きなものとなった。パレスチナ人民が選挙で選出したハマス内閣は武力により蹂躪された。このような中で、パレスチナにおけるヒズボ

ッラーの人気は、スンニー派、シーア派の垣根を越えて高まった。パレスチナの大義の前に、城内不安定化を懸念するアラブ人の声はかき消された。

### 【シリア・イラン】

イスラエル占領集結と共にヒズボッラーの正当性が問われるようになると、解放の支援者を標榜してヒズボッラー支援を継続していたシリア並びにイランは国際的圧力にさらされることになった。また、故ハリリー・レバノン首相殺害を契機として高まった国際的圧力の前に、シリアはレバノンに駐留していた軍を撤退させざるを得なくなった。さらに、イラン並びにシリアは、核開発疑惑やテロ支援疑惑等で米国を始めとする各国から非難された。パレスチナ並びにレバノンがイスラエルと武力衝突したことは、シリア並びにイランにとって、「アラブの大義」に訴えかけて正当性を回復し、国際社会の両国に対する厳しい目をそらし、将来に交渉のカードを確保することを意味したのであろう。

### 【イスラエル】

イスラエルは、ヒズボッラーによる攻撃の機会を捉えて、ヒズボッラーの脅威を壊滅させることを意図し空爆を行ったが、イラン等の支援を得た敵は、想定よりも強力であり、犠牲を強いられた。しかし、自国の安全を阻害するとみなす国の脅威を武力で排除する手法はイスラエルの常套手段であり、可能な限りヒズボッラーにダメージを与えようとしている。人質問題については影が薄くなったようだが、人質交換に応じれば、「テロ組織」を相手にしたことになるばかりか、「イスラエル人1名の命はアラブ人10名に匹敵する」としてきたこれまでの主張を覆すことになりかねなかった。

イスラエルは伝統的に、敵国側に緩衝地帯を作ることによって自国の安全を保証しようとしてきたが、今回も、ヒズボッラーにダメージを与え、レバノン側に緩衝地帯（もしかすると、緩衝部隊？）を築き、敵対的な勢力を隣国から排除することを意図しているようである。

### 【国連】

26日には、国連兵力引き離し部隊（UNIFIL）施設がイスラエル軍の空爆を受け、アナン事務総長は、イスラエル軍が国連施設を明らかに計画的に標的にしたと非難した。レバノン問題は、国際社会の意図通りに進んできたかは別としても、少なくとも国連の枠組みの中で動いてきた。イスラエルとしては、UNIFILの期限終了を目の前にして、国連にダメージを与えて撤退させて混乱の中でフリーハンドを得ると同時に時間を稼ぐと共に、南レバノン情勢を国際社会の監視状態から解き放ち、米国＝イスラエル・ラインで今後の事態を進めようとする意図があるのではないだろうか。

### 【アメリカと国際社会】

ライス国務長官はレバノンを訪問し、短期的な解決ではなく永続的な解決を図る必要があ

ると述べた。このことは、停戦という当面の人道措置を希求するのではなく、イスラエルの将来の安全を保証し、レバノン側に安全地帯を設置し、ヒズボラーを武装解除して、代わりに国軍を南部に展開させることを意味しているようである（米国によるレバノン軍の南部展開は、2001年5月の下院決議に見られるとおり、かねてからの要求であるが、レバノンの安全を守る部隊をないがしろにしてイスラエル占領下の民兵組織SLAの存在を支持してきた米国のダブル・スタンダードは、レバノン国民の脳裏に残っており、支持は集まらなかった）。

#### 【顔の見えないレバノン人とレバノン政府】

人道的見地に立てば、何はともあれ停戦を行わせ、それから議論するのが筋であろう。また、米国を始めとする諸外国からの援助に依存してきたレバノン軍は、徴兵制によって何とか形を整えてはいるが、民兵組織を排除できるほどに強くはない。レバノン軍の権威と力がカギになるかもしれないが、レバノンを強力にすることは、イスラエルの利益に叶わない。レバノン空軍が固定翼機をもてないことは、イスラエルの安全観に沿ったものであるが、このような安全観は皮肉なことに、民兵をのさばらせ、イスラエルの安全に脅威を及ぼしているのではないだろうか。レバノン国軍を強化し、国民の信頼を得られる安定的な政権の存在を許すことこそが、永続的な解決になるのではないだろうか。

このようにレバノン問題には、複雑な国際的方程式が存在し、この方程式の下で、各国が綱引きを繰り広げている。しかし忘れてならないのは、この方程式がレバノンの地で展開され、レバノン人の血の犠牲の上に成立していることである。この方程式は、どれだけの血を求め続けるのであろうか。